

小説

# 祖父の断片

大宮 純

朝のテレビドラマが終わって間もなく、電話が鳴った。受話器を手にとると、秋田に住んでいる娘の子・結衣であった。

「おじいちゃん。いまね。ゆいのおたんじょうびなの。よんさいになったのよ。からおけにいってくるね」と忙しそうに喋る。

「お誕生日、今日だったね。おめでとう。紗希ちゃんと一緒に出かけるの」

結衣には一才になったばかりの妹がいる。

「うん。さつちゃんもいくよ。だから、きょうではなく、いまなのよ。じゃあね」

と言って電話を切ってしまった。外出するのが余程嬉しい

ようだ。

妻の聡子に電話の内容を伝えると、

「あら、今日でなく『いま』なの。うふふ。結衣には、まだ時間の認識が出来ないのよね」と彼女は苦笑している。

「難病だったのに、こんなに元気になるとは思いもよらなかったよ」

結衣は、生後まもなくから数カ月間、睡眠時に呼吸量が低下する症候群に罹ったのだ。

「ほんとうにね」

東京に住んでいる息子の子・新太郎は何をしているのかな

とあって電話をすると、

「ぼくね。おとうさんと、これからラジコンをもってこうえんにいくんだよ。もう、ほじよりんなしでじてんしゃにのれるんだ。らいねん、いちねんせいになるんだ」と元気がいい。

「おじいちゃんとおばあちゃんは、秋に、東京へ行くから待っていてね」

「うん。はやくきてね」

新太郎は、父親から、私たち夫婦が住まいを盛岡から東京に移すことを既に聞いている様子だ。移すことになったのは、五十代の前半に多発性骨髄腫に冒され始めてから十二年経った私の体力が、途中で幹細胞移植術を受けていったん緩和したものの再び悪化して、岩手山下ろしの強風と寒気と冷氣、何よりも暖房費の重庄に耐えられなくなったのだ。

「長生き出来たのも、孫たちのおかげね」と彼女が呟いた。

「いや、そうではないよ。みんな、聡子が働きながら俺の介護や食事づくりをやってくれたからだ。でないよ、夢をみることもなくあの世に行っただろう。本当に有難う。負担をかけて申し訳ない」

食卓の席にいらんでいる彼女の顔を見て礼を言った。

主治医から、

「安西さまの生存率の中央値は二年、長くて四年の命です」と診断された時に頭に浮かんだのは、せめて息子が結婚するまでは、なんとか生きて居たいという夢であった。

息子が結婚式を挙げたあとに自家移植術を受けて病状がいったん回復したので、次の目標が娘の結婚式までへと伸びた。

孫が生まれると、今度は孫が小学校へ行くまで生きていたと思うようになったのだ。

「がんばって長生きして貰わないと、私だけの年金では楽しく生きていけないのよ。そろそろ、私にも、好きなことをさせて下さい」

聡子は、半分冗談混じりに頭をペコんとさせた。彼女の趣味は、謡と仕舞である。労働団体の書記局を退職した後、今春までパートの保育士として働いていたが、それも六十五歳定年で終わった。

「分かってているよ。もう無理しないで、用心深く生活しますから」

高校を卒業し、数年経たのち長年勤めた医療団体を病氣退職した後も、私は、夏の間だけではるが、あちこちの会に顔を出している。

食卓を離れて居間の窓外を見ると、純白の小手毬の花が満開となっていた。小手毬は、私が生まれ故郷で物心の着いたときに初めて知った、思いつくのある花である。

(……これが自然の生命力なのだ。結衣と新太郎たちのことがこんなに愛しく感じられ、自分の生きがいにもなるとは。……はて、俺は四、五歳の頃どうしていたのだったろう。愛情を注いでくれた祖父のことをよく分かりもせず、もう、こんなに歳を取ってしまった)

と何の脈絡も無く記憶の彼方へ廻り、故郷での祖父と両親のことを、懐かしく思いだした。

祖父・安西兜次郎は、私が五歳のときに亡くなった。日露戦争に出征し中国東北部で激烈な戦闘に加わった。危なく命を落とすところだったが、辛くも生き残った。

「剛史よ。俺は戦争なんか嫌いだ。おまんまを食えなくて、銃剣の先で死んだ兵士の尻の肉を切りとったヤツもいた。飲み水が無くて馬のしよんべんを飲んだもんだ。昼は暖かくてもな、夜になると寒くてよ。死んだ兵士の服を剥いで、包まって寝たもんだよオ」

と祖父は言い、自分の胡坐の中に入っている私を包むように抱きながら、戦争時の苦痛を思い出して泣いていた。

い箸が仕舞われていた。

母が食膳を運ぶと、

「剛史よオ。この箸は、お前のような細い顔をした戦友との絆なんだ。うーんと大事な、大事な……」

(銀色の箸が戦友との絆とは、どういう意味だったのか。はて……)

と、祖父の記憶はそこで途切れ、どこか不自然な流れを残したまま、両親のことが脳裏へ鮮明に表れた。

私の父・安西万治が、晩年、何度も行きたがったのは、生まれ故郷・岩手県中部にある江南区扇沢の生家と近くの尖った山・曾谷森にある神社と神楽殿であった。扇沢は広瀬川の源流域にある小さな盆地である。

父は、八十代の半ばころから前立腺癌に冒され始め、身を寄せていた東京の長兄の下から、盛岡の我が家へ移ってきた。

飯の前は必ず冷やの Copp 酒を飲み、日中は、子どもたちが学校から帰るまで、三輪車を漕いで老人クラブのゲートボールに出かけ、夜になると、子どもたちとオセロや将棋を楽しんでいた。

草木が萌えだしたある日の夜のことだった。夕食が済んだあと、父は食卓から、中々離れようとしなかった。顔を見る

「おじいちゃんは、ひとをころしたの。ひとのにくをたべたの」

と私は、不動明王のような祖父の胸と顔とを見上げて、訊いた。

「……うん。殺さないとやられるからな。仕方が無かったんだよ。銃剣に刺して火で焼いて食っている兵士もいたよ。火を使うときは、煙を外套で煽って散らばしたりしてな。南無阿弥陀仏って拜んで……。中国人に惨めな思いをさせてしまったよオ」

大粒の涙を零して、鼻水と一緒に顎まで濡らしていた。

「うまつこは、どうなったの」

と訊いた。母屋に隣接している馬小屋に飼っている可愛い親子馬とダブって、戦地に連れて行かれたという我が家の馬のことを知りたい。

「うちの馬は現地で弾に当たって死んだらしいよオ。軍馬は、足を折ったりすればもう使えなくなった。食うなって上官から言われていたどもな。持って行った食糧が無くなると、上官も見えて見ぬふりしてくれたのさ。馬肉は旨いよオ」

と答えて、祖父は囲炉裏へ稲わらのふわふわした部分を手で払い落した。私を胡坐の中へ入れながら縄を編んでいたのだ。囲炉裏の傍に漆塗りの茶箆筥があり、抽斗には、銀色の長

と、別段、体調が悪化したようではなかった。腰の痛みが強くて立ち上がれない風でもない。私へ何か話したいことがあるように感じられて、

「おとうさん。困ったこともあるの」

と尋ねた。

「う、う、うんとよ。あ、あ、あんな。た、た、剛史。し、し、死ぬ前に一度でいいから、お、お、扇沢に連れて行ってけるじゃ。た、た、頼む」

手で食卓をせわしなく叩きながら、申し訳なきそうに言った。

「そうだな。いつかは、お天気の良い日に連れて行ってあげるからね。どうだ、聡子」

食卓から食器を流しに運びながら私たちの会話を聴いている妻・聡子へ声をかけた。

彼女は振りむいて、

「そうしましよ。義父さんの体調が良くて、私たちが休みを取れる日に行きましょ」

私と彼女は仕事と子育てだけでなく、地域の助け合いもして、中々都合をつけることが出来ない。

「さ、聡子。い、い、いつや。こ、こ、今度の休みにか」

父は早く故郷へ行ききたがっている。

「剛史さんと相談してみますね」

「おとうさん。だから今度ではなく、そのうちに連れて行くよ」

優しく宥めた。

「ら、ら、来週か」

と父は粘る。

休みの日は子どもたちの相手をしないとけない。休暇を取って行くしかないのだ。

「扇沢のどこへ行きたいのや」

と尋ねる。

「こ、こ、小嶋さ」

小嶋とは生家のある集落名だ。名の由来は、昔、シギという鳥が棲んでいたことにある。

「小嶋のどこに行きたいの」

「み、み、みんなよオ。い、い、家にも行きたいしなア。た、田畑から山から、か、川から、そ、そ、そのへん一帯さ」

母・テルヨの話によると、父は、幼いころに祖父から酷い折檻を受けたのがもとで、極端にどもるようになったらしい。逆上させると、言葉の最後が荒っぽくなるのは祖父譲りなそうだ。

「でもその中で一番行きたいのはどこ。時間が無いんだし、

目標を決めてほしいな」

と私は食い下がる。

「う、うんだな。そ、曾谷森の、や、社とか、神楽殿に、の、上って見たいのさ」

曾谷森は生家の西にそびえている。父は神社の神楽殿で催される秋祭りの舞台上で太鼓を叩き、鉦を鳴らし、時には笛を吹き、自分が師匠となって少年剣舞団を率いていた。背筋を伸ばして太鼓を叩く姿は、自慢したくなるほど格好が良かった。

五月晴れの日。私たちはそれぞれ休暇を取って、父を故郷へ連れて行った。父は前立腺癌による頻尿のために紙パンツをはいているから「おしっこタイム」をあまり取ることは無いが、車への乗り降りが辛そうだった。

盛岡から江南区扇沢までは、車で約二時間の距離だ。父は、盛岡を出たあと疲れが出たらしく、ぼんやりしていたが、花巻を過ぎて東町に入ると、俄然元気になった。花巻や東町は、神楽や祭り、山師や炭焼き商売の用事でよく出た所だからであろう。

「そ、その店は、さ、笹長だ。しよ、醤油なんかをうんとな、か、買ってやったのさ」

と醸造所の看板を指さす。醤油を買ったのは事実であるが、父は酒をツケで買って飲んでいた。そのツケは長兄が盆と暮れに支払っている。父と母が貰う僅かな年金では、米と卵、醤油くらいしか購入できなかった。

持っていた田畑と山林は、山師で損をし、その借金を支払うために、自宅周辺の僅かな土地だけ残して売った。なんとか生まれた場所で生き残ろうとして椎茸栽培に精を出し、最後は、近所の土地を借りて椎茸の乾燥小屋までつくったが、酒を飲んで寝過こし火事で焼失した。

このとき、心臓を患っていた母は長兄のもとへ身を寄せ、発症した多発性骨髄腫の治療を受けている最中であつた。

「す、少しゆっくり走れじゃ。う、うんと、うんとさ。や、山を見たいのさ」

と言つて、昔、椎茸を露地栽培していたことのある榎林を指さす。指の先は車の振動なのか、それとも故郷を見た感激のせいなのか震えている。

「はい、はい。……ここで採れた生椎茸は旨かつたね。焼いて食べると頭がぼつとなつたものだ。な、聡子」

私は答えながら、運転席の妻に同意を求める。

「春のナメクジの出ないころのは、最高だったわね」

と彼女は、整った横顔を見せて昔を懐かしがる。榎林に陽が

射して、新緑の林の下で笹の葉が揺れていた。目的地の手前に差し掛かると、右手にそびえる山の斜面一帯がホップ畑になっている。

「じゃ、ちよ、長衛門屋敷の山は、ぜ、全部ホップ畑に変わったな。た、大したもんだあ」

と褒めたのでミラーを見ると、ミラーに映る父は、口をあんぐりさせていた。

「ほんとうだ。よくやっているな」

長衛門屋敷とは屋号のことで、長衛門屋敷の跡取りをしているのは、私の幼馴染・菊池馨だ。馨は、両親が年老いたために、栽培の作業を殆どひとりでやっている。馨の連れあいは、看護師なので、しかも車で一時間半以上もかかる隣町へ通勤しているから、栽培作業を中々手伝うことが出来ない。

私たちは小さな家の庭先に車を止めた。元は兜屋敷という屋号がついていた築百五十年余りの生家は風雨に晒されて傷みがひどくなり、一昔前に解体されている。栗の巨木で作った床柱と梁は、母の乳で育った近所の子で、今は玉山村の会社社長となつている男へ譲り渡した。

父は、昼食をそそくさと済まして、長靴を履いて杖を突きながら、這うように庭を横切り曾谷森へ向かう砂利道へと歩きただした。私は、父の様子を見ながら後を追つた。

聡子が駆けつけて来て、

「お義父さん。ゆっくり歩いてね」

と言つて、危なっかしい歩き方の父の腕を両手で支える。

父は、

「じゃ、とつてもだめだ。す、すぐ疲れてさ。ダ、ダメになつたじゃ。あ、足腰が動かない。い、息が切れるしよオ」と、イラつき、登りたかつた曾谷森の麓へ辿り着くのが精いっぱいであつた。

何度も、

「ダメになつたじゃ。う、うんと、ダメになつたんだなあ」と呟いては、悔し涙を零す。

「も、盛岡へ帰つて寝るじゃ」

と急に投げやり気味な態度に変わり、むっすりとなつた。

私たちは、父の様子を心配しつつ盛岡へ戻つた。

盛岡へ戻つて二、三日もすると、

「も、もう一回で、い、いいからさ。お、扇沢に行つてみてい。し、死ぬ前に、い、一回はみたい。そ、曾谷森に、の上つて、や、社の、か、神楽殿に触りたい」

と、父は我がままなことを言い出す。

私たちは日程を調整しながら、一ヶ月後に再び扇沢へ車を走らせた。車を曾谷森の麓まで入れて父を下ろす。

父は、山菜が盛んに茂る湿つた道を、杖こそ手放さないが

自信たつぷりの表情で登り出す。十数歩も進まないうちに、

長靴が水分の多い斜面で滑り出して、一歩も進めなくなつた。苛立つて杖を草地へ放り出し両手を斜面に手を着いた。

「ほ、ほんとにダメになつたじゃ。あ、足がよお。こ、腰もなあ。か、神楽殿を見たかつたのによオ」

と言つて、丸眼鏡を取り外し、頬を伝つて流れる涙を手ぬぐいで拭く。

「元氣になつたら、また来ましよう。ね、大丈夫だから」

と聡子は、慰める。

哀れさを抑えて麓から扇状地を眺めると、タンポポや露の藪の種が羽に支えられて風に乗つて舞つていた。昔、耕されていた田畑の殆どが無耕作地となり、中には杉林に変わつていくところもある。私が兄や幼馴染たちと泳いだため池も藻や雑木が茂り、湿地帯に変わつていた。

彼女が手伝つて父を立ち上がらせて斜面をゆっくり降りさせ、平べつたい花崗岩に腰をかけた。

「おとうさん。曾谷森中腹の鞍部にあつた新しい先祖の墓地は、どうなつているのかな」

祖父が亡くなつた時に、遺品と一緒に土葬した墓地の跡を暫く見ていない。

体を壊し、十分に働けなくなつた。

―凶作や米穀の供出によつて食えないときは、秋田の農家へ出稼ぎに出された。出稼ぎ先では真冬の寒さの中、家畜小屋の藁のなかで寝起きさせられ、稗と粟と味噌付けの食事は土間に座つて撰らされた。

―尋常高等小学校へ進学したかつたが、長女であつたから妹と弟のために諦めざるを得なかつた。

―結納金が必要で十六の時に嫁いだ。このことであつた。

手元に残っている母から私と妹宛に寄せられた昔の手紙を読むと、殆どひらがなでしか書かれていない。

「この間、送つた〇は着いたのでしょうか。へんじがないので心配しています。春になったら、しいたけが沢山でいくので、助つ人にきてください。ははより」

〇は、お金のことを指している。

「かぜをひいたりしていいのでしょうか。おまえたちの顔ばかりまいにち、まいにち夢にみえます。待つていますよ、本当にかならずきてね。〇は交通費です。ははより」

手紙を受け取つたころ、私は久慈市にある全日制高校から盛岡の定時制高校へ移り高校三年生で、同じ高校の一年生である妹と一緒にアパートの一室を借りていた。

「あ、墓はあるけれどもな。い、今は、そ、袖屋敷と、だ、台屋敷だけが、は、墓参りしているのさ。お、おらほでは、もう長い間、い、行つていない。い、今、押んでいる古い先祖の墓参りだけで、じゅ、十分だべ」

と、父は慌てたように答えた。享和と嘉永の文字をかすかに残す古い先祖の墓は、家の後ろにある。墓碑名は苔むしている。

父はその後、何度も扇沢行きを繰り返し、最後は東京の長兄のもとへ戻つた。

母・安西テルヨは、父の場合とは異なり、生まれ故郷である江南区十輪の角田へ、

「死ぬ前に一度は行きたい」

などと言わなかつた。十輪は扇沢の南側に接している村だ。村の中央を東西に流れる人首川は、東にそびえる種山高原が源流部となっている。角田は人首川沿いの段丘部にあり、段丘の下には亜炭の採掘場があつた。上は粘土質の田畑である。

母が、私に話してくれたところによると、

―おらが、十二歳になつたときに、父親が小作人と一緒になつて強訴に加わり警察に捕まつた。父親は逮捕がもて身

母は盛岡に出て来て、

「お前たちは幸せだな」と言った。

「なんでなの？」

と尋ねた。昼は上司に“このくそつたれエ”と怒鳴られながら自動車工場で働き、夜は教師に“定時制高校を出ても学歴にも、なーんにもならないんだじえ”と卑下されながら授業を受ける毎日、学問への夢をどうやって実現するか、と悩んでいる矢先のことだった。

「だっておらが子どものころは、貧乏で、本とか新聞を読めなかった。世の中のことさっぱり分からなかった。お前たちは、働いて給料を貰えるし、本とラジオを貰える」と、母は答えた。

言われてみれば、部屋には図書館から借りて来た小説と、購読している新聞があった。ラジオもある。

(本と新聞を読めなかったら、資本家と権力者の意のままにされるだろう。太平洋戦争のあとに生まれて良かったな。戦争放棄を謳った憲法もあるし)

と思った。

高校を出て間もなく、それまで勤めていた自動車工場をやめ、友人から薦められて労働組合の書記局に入った。そのこ

ろに長兄から届いた、私と妹宛ての手紙がある。

「いつまでも、年寄いた親を寒いところへ置いておくわけにはいかないと思っている。岩手と比べて、こっちは気温が暖かい。しかし、何度、二人へ東京に出てくるようにと勤めても、岩手で頑張るといつて遠慮し、いうことを聞いてくれない。どうかお前たちからも、両親へ、東京へ出るように話してくれないだろうか」と記していた。

私と妹は、帰郷した際に、何度も両親へ長兄の考えを伝え、“おらたちもそう思っている”と説得した。母が上京したのは、暫く後であり、父が上京したのは更に時が経ってからである。

幼い頃、母と一緒に、母の生まれ故郷・十輪の角田へ泊まりに行くと、叔母は露骨な態度で嫌がった。泊まりに行ったその日、一時間も経たないうちに、

「いつ帰るのや」

と訊ねるのだ。その目は、明らかに“食べ物が不足しているから直ぐ帰れ”と言わんばかりであった。

「おらは一つ泊まったら下の子を連れて帰るども、剛史はしばらく泊まらせてもらいたいのので、よろしく頼みます」と母は、穏やかに答える。

「おはようございます。きょうは、おからだのごかげんはいかがですか」

と尋ねる。

「おはよう。剛史の顔を見たら元気になったよ。お前も大事ないか」

と祖母は答えて目を細め、慈しむように私を見る。周囲に叔母の姿の無い時は、手招きされて、奥の間に入り傍に寄る。

「お前の母の父親は、うんと偉い人だったぞ。まだ聞いていないだろうが、テルヨは生死の境を潜ってお前を産んだのだ。天から授かった命と思ひ、勉強をして、世の中に役立つ人間になれるよ」

と言って、何かを射ぬくような目に変わった。母は、私が胎内にいたとき、戦地から引き揚げて来た半ば狂った炭焼き労働者によって棍棒で殴られて重傷を負ったのだ。

「うん。そうするから。あんしんしてください。中江兆民なかえちやうたかのようになります」

覚えたての言葉を使った。

「……そうか。少し本を開いているようだね。小嶋のじいちゃんが大事にしている銀の箸のわけを、ちゃんと聞いておくんだよ。……叔母ちゃんには内緒だからな」

と言って小遣いをくれた。

「おひっこさんの、了解を得たのすか」

と叔母が訊く。“おひっこ”とは祖母の呼び方である。

「あほ、そんななごどを言うもんでね」

と、傍らから叔父が叔母をたしなめた。

祖母は、長患いで奥の間に臥していて、めったに居間や中間へ出てこない。

奥の間の近くに専用のトイレが設けられ、食事は叔母が奥の間へ運んでいた。

「はい。この子のごどは、おひっこさんへ頼んでまいりました」

と母が答えた。

「ふーん。剛史ちゃんは、おひっこさんが一番可愛がつっているからね。一緒に住んでいる内孫よりも」

と、叔母は拗ねたようにいう。

「剛史よ。おらは一足先に帰るども、おひっこさんに毎日、ちゃんと挨拶してけるよな」

と母は言って、妹を背負い雪解し始めた段丘の杉に囲まれた暗い坂を、振り向くことも無く下って行った。

祖母と挨拶するのは、朝食が済んだあとだった。奥の間の南面にある縁側に私が正座し、頭を下げながら両手を板間についたあと顔を上げて、

「ありがとうございます。あのさ、おばあちゃん。おじいちゃんね。ぎんいろのはしは、だいじなだいじな、せんゆうとのきずなだつてしゃべっていたよ」

「絆ね。凍った戦場で死んだ兵士が残したもの……」

と言いかけて、何かを思ったらしく急に噤んだ。

（あのとき祖母が“凍った戦場”と表現したのは、いったい何であつたのか）

と考えた途端に、記憶の彼方から再び祖父のことが思い出された。

「お。帰って来たか。馬の餌と薪を絶やすなよ」と、祖父は外から家の中へ入って来た父へ声をかけた。

「は、はい。ど、土間へ薪を、は、運んだし。……う、馬へ与える、し、飼料の干し草は、だ、大丈夫ががす」

と、父は祖父へ答えた。

家長は祖父であり、父はその下に従っているだけであつた。自在鉤が吊るされた囲炉裏を囲む板の間には、祖父が上座にでんと座り私はその上座の中に入っている。

祖父は片目がやや白濁し、凍傷を負つたらしく、指の先が何本かてろてろと光っていた。自在鉤の高さと肩を並べるほど背丈がある

「じゃ。剛史は天の子、神の子だ。テルヨが命をかけて産んだからな。うんだべ。よ」

欠けた前歯の分厚い唇から、唾を飛ばして父に押し付けるように喋った。

「は、はい。ち、父上の、お、おかげががす」

と父が答え、母は笑顔である。

「不思議なものだじゃ。万治が戦争に行かなかつたから、剛史は生まれた。万治が家出して仙台にいたから、早く応召されなかつた。俺は恥をかいたがなあ」

父は、尋常高等小学校を出たあと、家の用事で花巻へ出かけた足で行方をくらまし、数年間仙台駅前のお店で丁稚奉公をしていた。仙台へ商取引で出かけた祖父の友人によって、所在が分かり連れ戻されたのだ。

「ち、父上の名誉に泥を、ぬ、塗りました。も、もしも兵隊検査に合格し、と、東京大空襲の前に横浜へ着いていたら、あ、危なかつたががす」

戦争末期の秋に父は丙種合格し、詳しい身体検査を受けるために弘前へ向かった。極度の近眼と腰痛症が仇となって、念願の入隊を果たせず家に戻された。

祖父が亡くなり、隣家の桶職人が作ってくれた棺桶に入れられた。白い幟を立てて、お膳と食糧や花を持った葬列が夏

の陽射しを浴びながら、菩提寺の銀昌寺へ向かった。

私は、団子を載せた箱膳を両手で包むように持っていた。

重くて、いまにも地面へ落としそうだった。寺での葬式を済ませたあと、曾谷森中腹の鞍部にある墓地へ行くと、白装束姿の男たちが、深く掘られた墓穴の傍で酒を飲んでいた。

棺桶は白い布で包まれその上から真新しい縄が十字にかけられている。十字の上に太く丸い輪が結ばれ、その輪に表皮を削った棒が差しあつた。

集落の人々がその棒を担ぎあげて、棺桶をそろそろと墓穴へ下ろしていく。

「剛史。お前が一番好きな人へ、花っこをたむけてくれよオ」

と母が言い、葦とタンポポの花束を寄こした。

「おじいちゃん。しんではだめ。めをさまして、おらといっしょにこはんをたべてよ」

と私は、喚きながら花束を棺桶の上へ置いた。四つ年上の兄が、祖父愛用の銀の箸を特製の箸箱に入れたまま、その横に置くのを見えた。

棺桶の上に粘土質の土がかけられて、祖父は土の中へ消えた。

「おじいちゃん。おじいちゃん。つちをかけられるまえに

げて、かえつてきてよ。おらはさみしくなる」

不安でいっぱいになり泣きじやくった。

日露戦争で生き残った英雄として葬儀は盛大に執り行われた。

自宅の奥の間と中の間、寝間と台所の仕切りが全部とっぱらわれて、黒漆塗りの豪華な膳が所狭しとばかりに並べられた。

「こんなおぜんこは、どこからもつてきたの」

と私は母に尋ねた。

「納戸に仕舞つてあつたんだよ」

母はそう答えて、寝室の北側にある廊下の奥を指さした。

そこは、祖父が生前

「絶対に入つてはいけない」

ときつく注意していた謎の部屋である。

私は、参会者が酒食に夢中になっているころ合いを見図り、そつと納戸を覗いた。いつもは締められている引き戸が開いていた。

天井の隙間から僅かしか外光の射さない真つ暗な部屋は土埃の臭いが充満し、鍵のかかった大きな板箱が五、六個あり、棚に獅子頭と武具、書箱や掛け軸が沢山あつた。

祖父が亡くなった翌年の春に、我が家の奥の間に間借りしていた菊沢常吉一家が関西へ旅立った。私は常吉のことを「常さん」と呼んでいた。常吉の妻は、私の母を棍棒でめつた打ちにした、炭焼き労働者の元妻である。

縁側を伝って奥の間の戸を開けて部屋の中を見ると、壁の上の窓から射す僅かな光の下で、顔のほつそりとした目のきつい常吉の妻と、暗い目をした女の子がいた。

「春江。遊んじゃいけません。剛史くんとは」

常吉の妻が女の子に、小さな声で注意した。

春江は、一瞬、悲しげな表情をしたが、内側から痩せ細った手で戸を閉めた。

私は両親に、

「どうして、はるえちゃんとおそんじやいけないの。どうしても、おくのまににいるつねさんのおよめさんたちは、へやのなかにばかりいるの」

と事情を尋ねたが、

「う、うーん。……お、お前が、お、大きくなったら、お、教えるからな。む、難しい訳があるのさ。な、テ、テルヨ」

父は、窮して母へ答えを回す。

「うんだな。だんだんに春江ちゃんも外へ出てくるんだが、待つている」

と母は、答えを先へ延ばした。

夕食の後、兄たちと中の間でくつろいでいると奥の間から縁側を伝って常吉が現れ、

「剛史ちゃん。おいで」

と優しく声をかけて、膝の上に抱っこしながら絵本を読んできた。それが毎日続く。

「もしかして、ほんとうの、とっちゃんはつねさんかもしれない」

と思った。

実際、家へやってくる行商人の多くが、

「この子は、御両親に似ていませんね」

などと話しているのを耳にしたからだ。

祖父が亡くなったあと、父は山師の仕事でひんぱんに外出するようになり、仕事のついでに飲食とパチンコに凝って、家に戻ってくるのは段々と夜遅くなった。父の顔を見るよりも、常吉の顔を見る方が回数も多く、しかも長時間になった。ただし、顎髭をざりざりと私の頭へぶつけるので、それが痛くて困った。

雨の日。珍しく、どこにも出かけずに家にいた父が、

「剛史。お、お前は、おれの子だぞ。つ、常さんにばかり抱っこしていないで、こっちゃん来い」

と手で招いた。汚れた手ぬぐいで頬被りし、酒臭い息を吐いている。

「どこのおんちゃんだっけな。あ、とっちゃんだ」

そう気がつくまで時間がかかった。

常吉は、炭焼き労働者だけでは一家を養うのが難しくなり、妻の実家がある名古屋へ出るようになった。

水雨が降る寒い日であった。常吉一家は、風呂敷包みを二つ持ったきりの姿で、

「万治さん。テルヨさん。安西家のみなさま、長い間、本当にお世話になりました。剛史ちゃん、元気でな」

と、ぼろの上に蓑を着て番傘を差し、泥だらけの長靴姿で泣いた。常吉の生まれは、隣村・金剛の萬像寺である。

「おらも、つねさんといっしょにいこう」

と叫んで、私は常吉の腕に取りすがった。

「剛史ちゃん。ごめん。あっちに行つて成功したら、きつと会いに来るからね」

常吉は、困り果てておろおろとした。

その傍らで、

「なにを喚んでいるのさ。この餓鬼め。こんな惨めなところから早く出たいんだよ。都会に出たら、お前なんか足手まといになる」

と、常吉の妻が憎らしげに呟いた。

「いやだ。いやだ。おらもつれてつてくれ」

私は、駄々をこねて泥水の中にしゃがんだ。

「剛史。常さんに迷惑をかけるんでねエぞ」

母が冷たい雨に打たれながら、私を叱り抱き起した。

「じ、じゃ。た、達者で。す、すこしばかりだども」

そう父が言つて、餞別を手渡した。

常吉一家が行つてしまうと、

「この甘えん坊。これからは、だーれもお前の味方は居ないんだぞ」

兄たちが私を叱った。

「じゃ。この子は、万治さんの子じゃないな。神様がどこから連れて来たような気高い顔をしている」

樺太から引き揚げて来た、熊のような毛深い炭焼き労働者が言い、

「木の股から生まれて来たんだよ。こいつは」

兄たちがからかった。

相手は、祖父が亡くなる前まで我が家への出入りもままならなく、常吉一家が奥の間に住んでいるときは、母屋の西側に設けられている神池を拝むふりをしながら、奥の間を覗い

たりしていた男である。

父の手下となって、あちこちから山林売買の情報を仕入れて来ては、褒美の酒や食糧をねだる。兄たちは、それを分かっているが応じているのだ。

丁度、父は所用で外出して留守であった。

母が、

「これ。そんななごを言うのであれば、この家の敷居を股がさせないぞ。謝れ」  
と厳しく叱った。

「ひや、ひや、ひや。冗談、冗談。……この通りですが」

相手は、奥歯が見えるほど下品な笑いをして、掌を合わせて汗を拭きふき頭を何べんも下げた。

子手毬が咲き誇る日の朝のことだった。母屋と井戸の間に建っている蔵に入った。母と一緒にいる。太い柱と板と葦でがつしりと組み上げられた壁に囲まれて、大きな米櫃や雑穀入れの箱が並んでいた。白と杆、農機具もある。棚には蚕を育てるための容器と網が三、四十個、梁の上に青大将が何匹も居た。

蔵から外へ出ると、母が、

「子手毬と大手毬は刈るんじゃないぞ」

と言って、草刈り鎌を私へ手渡した。

「土手に茂った草を刈れ」

子手毬と大手毬は、以前に梅とスグリがあった場所に植えられていた。梅とスグリは、二番目の兄が疫痢で亡くなったあと切り倒されたのだという。亡くなった子の事を偲んで、母が十輪の角田から運んで来た花木である。

「強い男になるにはな。頭が賢いだけではだめだ。鎌や斧を使えないとだめだ。いつ、だれに襲われるか分からないんだぞ」

母は、乗馬をなんなくしてのける男勝りだ。

「お前のおとつあんは、腕力が無いから他人にだまされたり、負けたりするんだぞ」

だんだんと、棍棒で殴られたときに父が助けてくれなかったことを思い出して恨みっぽい言い方になる。

「とうちゃんが戦争に行かなかったから、おらが生まれたんだって、おじいちゃんが言っていたよ」

父が可哀そうに思えて言い返した。

「あんときは、戦争に行かないものは非国民だったんだぞ。戦争で負けたから、うちは田畑が小作人に分けられてしまった。うーん。人の一生って……分らないことだらけだよ」

母は、急に頭を振って考え込んだ。

三、四十個もの蚕箱を覗いて、死んでいる蚕を指でつまみ小さな籠に入れることであつた。

常吉一家が関西へ出てから暫く経った年の秋に、名古屋を伊勢湾台風が襲い、常吉からの便りが途絶えた。二ヶ月ほど経った初冬、満像寺から常吉の兄がやって来て、両親へ常吉一家が行方不明になったことを告げた。

母が、

「常吉さんは、おらを襲った男が青森の刑務所で死んだあと、その男の元の妻と結婚したのよ。常吉さんは、おじいさんの戦友で命の恩人とも言える満像寺の住職だった菊沢常信さまの甥っ子だ。おじいさんが死んだ後、おらたちが常吉さん夫婦と子どもの春江さんを、おらの家に連れて来て奥に住まわせたのよ」

と常吉との繋がりを話した。

自在鉤に吊り下げられて炉上に下がっている鍋がひっくり返された途端に、鍋の汁が火の上に零れて湿った音を発し、灰が煙のように舞い上がった。

「昼の高校へ行かせるって言ってたべ。約束が違うよ」

と二つ年上の兄が言って立ち上がった。その眼は半分狂った

祖父母が植えた桑の木が大きく育ち、葉が茂り、蚕を育てる作業が始まった。両親と姉は大きな籠を、二人の兄は小さな籠を背負い、私は四つ歳下の妹の手を引く。

分厚くて緑色の瑞々しい葉が一枚、そして一枚と桑木の枝に傷がつかない様に採られ葉数の少なくなった桑木の枝を見上げると、紫色をした桑の実が顔を出している。

「実っこは、まだ食べべてはなんねエぞ」

と母が注意する。

「濃い紫に染まってから食べ。それも、晴れた日の午後三時ころが一番美味いぞ。食い過ぎると、尻の穴から黒いのが出るぞ」

兄が半分からかいながら言う。

「か、蚕の世話をちゃんとししないで、あ、遊んでばかりいてはだめだ。た、剛史にも手伝ってもらうからな。ま、祭りの、こ、小遣いを、や、やるがらよ」

父が、そう言ったので驚いた。

蚕は母屋の中の間で育てた。中の間と通じる各部屋と縁側の隙間は新聞紙で目張りされた。母屋の風呂は、畑の傍に運ばれた。囲炉裏と炊事用の窯は使用禁止となり、炊事は、母屋と馬小屋の間にある通路で行われた。

私の仕事は、竹と木で組み立てられた棚に乗せられている



感じた。

「ん、んでもなや。か、金がよオ。つ、都合がつかねえんだ。だが、だがよオ。が、我慢してけろじや」

度の強い丸眼鏡の奥の目をしよぼつかせ、父はおどおどしながら有めようとした。

「うるせえ。おじいちゃんが死んだあと、商売が下手な親父のせいで、この家は、まるつきりおかしくなったでねえか」

兄は荒々しく廊下を走り、土間に降りると外へ飛び出して行った。

それは、あつという間の出来事であった。私は、両親がこの場を何とかうまく収めてほしいと心配するだけだ。

「あんだや。なじよにがならねえのすか」

と母は、やつれた顔で頼む。

「ん、んでもなや。パ、パルプ材が、う、売れねえのさ。な、なんともならねえ」

父は目を瞑って答えた。

私は兄の後を追った。兄は長衛門屋敷下にある友人の家へ向かって走っていた。兄は夜更けに戻って来ると、夕食も摂らずに寢床へ入り布団を被ってしまった。夜中に、すすり泣きが聴こえた。

兄は春がまだ先の、山に残雪が見える中、集団就職のバス取りは早朝か日曜日によれば済むのだが、稲刈りだけは何ともならない。

よく晴れた秋空の下で、父と二人して稲刈り鎌を振るう。稲穂が金色に輝きながら半円を描いて垂れ下がり、稲の実が程良く乾燥しているその時を待って、田の表面から十センチほどの高さの茎の部分鎌で刈るのだ。

同級生と下級生に遭わない時間を狙って私は作業を始める。学校を休まざるを得ない事が悔しく、悲しかった。

「小屋つこだよ」と母が呼んだ。

丁度腹が空いていた私は、傍でせいぜいしながら鎌を振るっている父に声をかけ、少しぬかるむ田んぼから、いまにも脱げそうな泥長靴を上手く連んでくろの外へ出る。

くろとは田んぼの周りを固めて水漏れを防ぐ一種の土手のことだ。草地は春の青さよりも濃く、つやつやと光っている。「ここらへんが眺めもいいな」と言つて、母は莫塵を私へ手渡した。

田んぼのあぜ道へ、その小さな莫塵を敷くと、母はその上に赤飯と漬物を並べた。赤飯には、前日拾ってきた栗が入っている。

父は、稲刈りを放り出して、どこかへ出かける理由を思い

に乗って手を振った。見送るのは私と四つ年上の兄、そして妹の三人だ。日の丸が振られ、万歳を三唱した。

四つ年上の兄は高校の授業から戻ると、農作業で忙しかった。疲れ果てて泥の付いた長靴姿のまま、廊下の端に寝ていた。そっと寝顔を覗くと、眠っていないく、臉からつつと涙が零れ出し、頬を濡らしていた。

兄たちが全員、村を離れた後、我が家の田畑を耕作する労働が私と妹へのしかかって来た。母は心臓を患っているし、父は近眼の上に腰痛症である。

山師の仕事に失敗したにもかかわらず、父は未だ小銭を稼ごうとして、早朝からあちこちへ出かけ、戻って来るのは、いつも昼飯時である。昼食を摂ると、思いついたような理由を挙げて、

「ち、ちよつと、で、出かけてくる」と止める暇もなく、外出してしまう。

稲の苗を植えるために集落の共同作業の「結いっこ」だけは、父も短時間、長い時で半日は顔を出すか、あとは、「た、剛史。お、お前が行って来い。こ、小遣いを、や、やる」と命じて、早朝に姿をくらます。

学校を一週間ほど休んで、田植え作業に従事する。田の草

ついたらしく、泥靴のまま無言で立ったままだ。「ほれ、あんだも座って剛史と食べてけろ」母が勧める。

「ち、ちよこつと、よ、用事がでたがらな。あ、あどは、剛史に頼む」赤飯を、美味くもなさそうな顔で食べている。

「ハハハ。わがね旦那だ。この田んぼを全部刈り終わってがらでないよ、絶対、どこさも行かせねエぞ」母は、小さな子をなだめるような言い方で夫を叱った。

「ほ、ほんでもよ」と父は、おろおろしながら逃げようとした。

「ほほう。なんたら何をバカなことを言つて。剛史は今日で三日も学校を休んでいるんだじゃ。その分、学業が遅れるべ」あきれ顔で夫を見ながら、「食え」と呟いて赤飯から栗の実を取り、私の茶碗へ入れた。

「あーあ。剛史が中学を出たら高校へ行って、ここで一緒に暮らしてくれば、なんぼ幸せだべな。田畑が残っていさえすれば、なんとかなると思つていたが……。娘がいるからまだ寂しくはないが、悲しいな」

母は、私が中学を出て直ぐに東京のどこかへ就職する予定であることを嘆いた。

「ん、んだがらさ。か、金を稼ぎに出かけた。か、金さえあれば、こ、高校に行がせられるのさ。い、稲刈りなどやっている、ひ。……暇がもつたいない」

と父は、まだ稲刈り作業から抜け出す気である。

「ははん。おじいちゃんが怖いから仙台に逃れたというし、おらが強盗に棍棒で殴られたときは命欲しさにさつさと逃げたし、本当に根性無しだね、あんだは」

母は苦笑しながらうつ向いている夫を語った。

「ん、んでない。そ、それは。……い、いろいろ事情があるのさ。い、いま、しゃ、喋ってる、ひ。……暇がねえのさ」と言い逃れて父は反論しない。

「おれは都会へ出るよ。可哀そうだどもな。妹もいなくなつたらさ。とうちやんとかあちゃん、兄貴のところへ身を寄せて暮らせばいいんだ」

私は農業を引き継ぐ気が全くない。父が祖父の代に築いた財産の殆どを山師の仕事で失敗した穴埋めなどに使ってしまった、耕す土地が残っていないからだ。残っているのは、食うだけの分しか取れない田畑と家の周囲の防風林、朽ちかけた母屋と馬の居ない馬小屋だけである。

「昼の高校へ行かせることも出来ないようになって、本当に悪いな。こんな貧乏になるなんて思ってもみなかったしよ。

おらのことだけなら我慢するけれど、子どもに未来の夢を狭めさせてしまうなんて恥ずかしいじゃ」

母は、なおも夫を責めている。

「さ、稲を刈るぞ」

と私は、表わら帽子を手に取り、母の嘆きを振り切って立ち上がった。

泥の乾き始めた長靴をはき、シャツの裾を手首までおろし、軍手をはめた。

ぼやぼやしていると、今日中に稲刈りが終わらない。終わらないと、明日も学校を休まなければならぬのだ。

父は、口の中で何かを言いながら鎌を振っていたが、母が小屋の後片付けをやつて家に戻ったのを見ると、直ぐに稲刈りを放棄してどこかへ出かけて行つた。

稲刈りが済んで間もなく母の心臓弁膜症が悪化し、即入院となった。

入院諸費をねん出するために父は山師の仕事を見つけようと焦つたが、もうすぐ冬になるといふ季節的な事情も重なつて、上手い仕事は入らなかつた。

家事は妹に振りかかった。父は飲み代を優先して食事の材料を買う金を渡してくれない。仕方がないので、古くなった

食用油を溶かして醤油と混ぜ合わせ、麦飯にぶっかけて食べる。雪の下から凍りついたキヤベツを採つて来て油で炒めた。そんな状況を見かねて長兄が私を引き取り、久慈にある全日制高校へ行かせてくれることになった。東京への就職活動をしていた私は、急遽、高校進学のための受験勉強をしなければならなくなつた。

岩手県北部沿岸の町、久慈へ出発する日の朝、私は妹の見送りを受けて父とともに東町行きのバスに乗つた。妹は泣きべそをかいて、谷間の県道を登つていくバスの中の私へ手を振つた。

私は悲しいような気分とともに、青春生活への期待が胸に膨らんでくるのを抑えきれない。県立東町病院に入院している母を見舞つたあと、国鉄釜石線の上り列車を待つた。服のポケットには母が寄こした百円札一枚と、父が寄こした百円札二枚が入っている。

駅まで見送りに来た父が、

「こ、これで暫くは会えないな。ぼ、盆には帰つて来いよ。

い、家のごとは、し、心配するな。な、何とかなるべ」と零れる涙を手ぬぐいで拭きながら、半分絶望的な塩梅だ。

「さつき、かあちゃんが、パンも何も買つて来なかつたのか」って言っていたけれども、兄さんが寄こしたお金は無く

なつたの。それに、“あんだは根性無しだ”って言つてたけど、どういふことなのさ。俺に何にも話さないでいいんだべ

が」

母が語つたのにも関わらず、なんら弁明しない父がへんに思えた。

「い、家出して、せ、仙台に行ったのは……。と、兜次郎さんが、こ、怖かつたがらだ。な、なにしろ日露戦争の、え、英雄だつたがらな。ひ、火箸で叩かれるし。……日露戦争で亡くなつた。な、南部利祥中尉のように、せ、戦地で、ち、散れつて言われるがらよ。……し、死ぬのがいやだ」

周囲に聞こえはしないだろうかと、辺りをうかがいながら答えた。

「俺は、おじいちゃんが日露戦争から生きて戻つて来たから、とうちゃんが産まれた。とうちゃんが戦争に行かなかつたら、俺たちが産まれた。それで良かったと思うな。母ちゃんが棍棒で殴られたときは、本当に逃げたのが」

それだけは許せないと思つて訊いた。

「ほ、ほんでねえのさ。と、テルヨは、き、気絶していだがら、わ、分らないと思うが。こ、強盗を引き寄せるために、に、逃げるふりをしたのさな」

これだけは本当だと言わんばかりに、眼をしつかりと見開

いて答えた。

「ニュースでは、この間から、与党の第一党が憲法を改正して国防軍を保持する考えだと言っているけど。……この先、どうなるのかしらね」

と聡子がアイロンがけの手をとめて不安そうに聞いた。

「戦力を保持しないし、国の交戦権を認めないという憲法の条項を削除してまで軍隊の位置づけを高めるのは、……。彼らの狙いが、米軍と共に他国を攻めることにあると思うよ」

「絶対に、新太郎を戦争に行かせないわ」

彼女は目に涙を浮かべている。

「俺だって、やりたい放題に進むのを黙って見てはいない」

ふと祖父が生き残った日露戦争の実相と、銀色の箸がどんな意味を持っていたのか、祖父の足取りを知りたくなった。

「兜次郎おじいちゃんは、旅順の攻略作戦に参加したのだったろうか」

と横浜の次兄に確かめると、

「りよ、旅順には行っていない。どこだっけな。戦争に二度行ったはずだ。長兄が詳しく知っているとしよう。……歳を取って考えてみると、『人間万事塞翁が馬』なんだな」

飯などを食した。抗がん剤の激しい副作用に耐えられず服用をやめ、玄米菜食に変えたのだ。

「結衣たちはカラオケから戻って来たのだろうか」と彼女に訊いた。

「あらあら、剛史さんは孫が可愛いのね。電話をかけてみたらどうかしら」

「そうするか。……昼寝をしたらさ。県立図書館に行きたいので、送ってくれないか」

急に思いついて頼んだ

「日露戦争の奉天大会戦について調べてみたい本があるんだ」

いっぴなく気力が充実している。

「大丈夫なの。身体に響くようなことをしないでね」

心配気な表情だ。

昼寝の前に結衣へ電話をかけるよ、

「ゆいはおからおけからかえってきて、けーきをたべちゃったんだかつかれた。もうねむいの。さっちゃんもいっしょにおひるねするのよ」

図書館から日露戦争に関わる歴史書と生まれ故郷の史料を借りて来て目を通した。奉天大会戦と、その前の黒溝台会戦

東京の長兄は、

「旅順ではなく、奉天大会戦に加わった。二度ではなかったはずだ。たった一人だけ生きて帰ったから村では英雄扱いだった。金鶏勳章か何かを貰った」

という回答であった。

確かに祖父は、

「金鶏勳章をいただいたのよ。俺には、勳章よりも銀の箸の方が宝物だな」

と言つて、飾りのついたメダルを見せてくれたことがある。

祖父は、母が炭焼き労働者によって頭部などをめつた打ちにされたとき、なにをしていたのだろうか。

四つ年上の兄に尋ねた。

「そのときは、確かナレに行っていた。おじいちゃんはナレが好きで、いつも其処に行っていたんだよ」

と切り出して、祖父から聞かされていたことを語ってくれた。ナレとは、本来、冬に山脈に沿って吹く強風のことを指しているが、生まれ故郷では山中の盆地のことを「ナレ」と呼んでいた。

「ジュースと昼ご飯の用意が出来ましたよ」

という聡子の声が聴こえた。柱時計をみると正午を回っている。野菜のジュースを飲んだあと、ニンクスープと玄米こ

へ参加した祖父の所属した師団がどこであるか分かった。史料で調べることが出来ないのは、昔の先祖の墓と祖父が好んで出かけていた「ナレ」の様子である。

幸いに故郷には、幼馴染みの菊池馨がいる。迷惑を承知で夜に電話した。

「二両親の仏前に焼香して、四方山話をしたい」

と切り出して端的に目的を伝えた。

ホップ生産協同組合の組合長をしているから、週に二日は留守であるが、

「その日は在宅しているよ。どうぞ。私は、一人でもかまやっているのではなくて、南部杜氏の方に夏だけ手伝って貰っていますよ」

妻の運転で出かけたその日は、梅雨の晴れ間となった。

「私は、あの上り坂が苦手なのよね。怖いから」

と彼女は心配した。馨の家に行くためには、風化した花崗岩と粘土を混ぜて固めたような、車一台がやっと通れる狭い急坂を上らなくてはならないのだ。

「まず、ゆっくり運転してくれないか。雨が降っているわけでもないから、でろでろしてはダメな大丈夫だと思っよ」

「あら、栽培面積を広げたんじゃない」

「そのようだな。道が真っ直ぐになっている」

道の両側にはホップ畑がある。道の南側の畑は新しく作つたようだ。以前の坂はもつと南側の崖の縁にあったのだ。

四百年の歴史を持つ馨の家は敷地が一千坪もある。家の軒下は、旧盆の慣習で霊を迎える花壇で埋められ、壁に棚が設けられて、そこには鉢植えの花が五段二十鉢も並んでいた。

先祖代々の家屋敷を殆ど手つかずのまま継承しているのだ。

馨夫人が、

「どうぞ。中へ」

「遅くなってすみません。失礼します」

勝手知っている、幼馴染みの家上がった。

中の間を通り常居から仏間へ入った。古い漆塗りの仏壇は、金箔の跡を残している。

「いま携帯で連絡を取りましたから、間もなく戻ると思いますが。少しお待ちください」

と夫人が告げた。

「崖下の棚田だったところは、畑にされたんですか。何を植えているんでしょう」

畑には野菜らしいものが見えなかった。それで尋ねたのだ。

「稲作はやめてイチゴを植えたんですが、鳥に全部食べられました」

彼女は、面白可笑しくそうに答えた。

「トウモロコシとメロン、スイカも全然だめでした。タヌキやキツネなんかのために作っているようなものです」  
と付け加える。

昔、我が家も同じ様な状況だったな、と思った。石ころだらけの養分の痩せた畑で採れるものといえば、小豆と芋くらいで、大根と蕪は、ネズミに食われてダメだった。

「そうですか。頑張っていますね。ところで、ご先祖さんは、もしかして日露戦争に行きませんでしたか」  
と尋ねた。

「祖父が残した従軍日記がありますよ。この家では代々、書きものを残して受け継いでいるのです。私も嫁に来てびっくりしました」

彼女は突然、目を輝かせた。

「えっ。日記が、ですか」

記録が残っているとは予想もしなかった。

「や、や。暫くぶりです」

と言つて、馨が部屋に入つて来た。夫人は茶を用意する為に席を立った。

「もつと早い時間に着く予定でしたが、盛岡の出發が遅くなって申し訳ございません」

妻が、そう言つて頭を下げた。

「営業妨害をすまないな。来ようと思つてはいたんだが、体調が悪かったりして今日まで延びてしまいました。元気な様子を見て安心しましたよ」

「こちらこそ。剛史さんも元気そうでなによりです」

私たちは一年ぶりの再会を喜んだ。

夫人が手作りの南瓜饅頭を盆にのせて席へ運んで来た。

「うわー。上手ですね」

と妻は、出来栄の美しさに目を細めた。

私は早速饅頭を手で掴んで頬張る。

「去年の秋に、中学校時代の同級生から聞いたんだけど、福島第一原発事故から発生した放射性物質が、この辺り一帯を汚染したんだそうですね」

と切り出して、子牛を生産している酪農家では牧草地の草を使えず、牛に食べさせる草は青森県と北海道から購入しているらしいと伝えた。

「牧草地の除染はやつと終わったけれど、いざ放牧となればかなり躊躇しているのが現状だね。今は、牛に与える草は、アメリカから輸入しているそうですよ」  
と、彼が言葉を選びながら答えた。

「扇沢椎茸もダメになったと聞いたが」

と続けて、椎茸の露地栽培は禁止され、それまで生産していた原木を廃棄した。露地栽培の再開時期に目処が立っていないそうだが、それが今も続いているかどうかと尋ねた。

「椎茸は圃場が汚染されたままだし、山も木もみんな汚染されているから、菌に放射性物質が吸着して何ともならないのさ」

「いままでに一度も見たことのないような、暗くて厳しい表情だ。」

「ホップは大丈夫ですか」  
生計を立てている栽培物が危ないのであれば、この先どうなるのだろう。

「検査してみると、自然界に存在する数値だった。ホップの場合は水捌けのいい土地で栽培しているし、しょっちゅう水をやり、葉を散布しているからね。除草をやつて土壌も毎年入れ替えているのですね。でも、私のホップさえ良ければいいというわけにはいかない」

そう答えて、唇を噛んでいる。彼は、扇沢区全体のリーダーの一人である。

「ナレの奥に段々畑の跡があったが、昔はあそこでも何かを栽培していたんだね」

ナレには、祖父の代まで田畑と栗林があったのだが、祖父

が死んだ後、耕作放棄地となった。

「やっていたと思うな。うちでも玉石を積んだ段々畑の跡が、後ろの山の斜面に残っている。この辺は昔、造山運動で隆起したところだからね。海底で爆発した火山の跡が上がって来て、水晶も産出されているし、金も採れたらしい」

郷土の歴史に詳しい。

「みんな、ナレを越えて北上の金剛へヒシを探りにいったね。満像寺の本殿を拜んで鐘を撞いて面白かった」

「ヒシの実を投げて忍者の真似をしたり。ハハハ」

私たちは、放射性物質の悪夢からいったん解放されて、子ども們のころに戻った。

「ところで、さつき奥様からお聞きしたんだけど、おじいちゃん日は露戦争の従軍日記を残しているそうですね」

と切り出して、祖父が日露戦争でかくも生き残り帰って来た様子を説明した。

「おお、さすが調べが深いな。私の叔父さんが、おじいちゃんの軍人手帳に記された日記の部分を読ませてくれたのさ。何しろ仮名遣いの日記なので、中々読めないんだよね。不鮮明なところもあるし。……いま持つて来ますから」

と言つて、彼は隣室から小さなノートなどを手に戻つて来た。「私も驚いたんだけど、日記をつけて注意されなかったんだ

ね。今なら情報が漏れるから許可されないと思う」

居間のテーブル上に置かれたノートはB5判を半分にした大きさで、表紙に「NOTEBOOK」と横文字が、縦に明朝体の「軍人手帳」という文字があった。

「日露戦争辺りまでは、日記をつけるのが自由だったんじゃないですか。意外とのんびりしたムードが有ったのかもしれないわ。今のように軍隊の管理が厳しくなくて」と妻が言った。

「読むと分かりますが、毎日、銃を点検し、行軍の練習などをやって給料を貰い、将棋を指していたようですよ」と彼が愉快そうに答えて笑った。

「ちよつと見せていただきますね」

私は解説されたプリントを読み妻へ渡した。軍人手帳に目を通して見ると、

「あら、戦争に行かなかったんですね」

と妻がちよつと驚いた声を発した。

「そのようですね。しかし、奥さんは読むのも判断も早い」

彼は目を大きく開いている。夫人も頷いた。

「そんなことは無いですよ。でも、どうしてかしらね」

妻は、首を傾げた。

「歩兵第三十一連隊は黒溝台開戦と奉天大会戦に参加した

と記されているよ。……戦地に向かう時から日誌をつけたかったのかな」

即座には分からなかった。

金鶏勲章を貰ったという私の祖父は、馨の祖父と同じ連隊では無かったのか、と新しい疑問が湧いた。一刻も早く、祖父が第二軍第八師団のどの連隊に属して、何の勲章を貰ったのかどうか確かめようと思った。

「解説した日記をお借りしていいでしょうか。すぐお返ししますから。昼休みの邪魔をしては申し訳ない」

柱の時計は正午を過ぎていく。

「奥さま、御馳走になりました。私も蒸し饅頭に挑戦したけれど、こんなに立派な饅頭は出来ませんでしたよ」

妻が夫人へ礼を述べた。

「いえいえ。私も、亡くなった義母さんから教わったようにやるんですけど、まだまだ未熟です」

と夫人が謙遜した。

屋外へ出ると真夏のような太陽が扇状地の隅々まで陽を注ぎ、何もかも乾燥させていた。

「奥さま。南瓜饅頭を詰めたものですが」

と言つて、夫人が菓子箱を妻へ手渡した。

「こんなに沢山。お気づかいいただいて済みません」

二人の見送りを受けて坂を下り、生家の敷地に車を入れた。家の後ろにある先祖の墓へ花を手向け、昼食を摂るためである。食事のあと妻が休んでいる間、私はナレに行く道を上った。

隣家の幼馴染みが作っていた椎茸の圃場と原木が、杉林の中へ沈黙したままとなっていた。その幼馴染みは、春にあの世へ旅立っている。椎茸栽培に絶望して急に、逝つたのかもしれないと思った。

ナレへの入り口に、いつの間にか別荘風の建物が立っていた。「私有地につき、入山禁止」の立て札もある。ナレは鬱蒼とした樹木に覆われ、昔の山道の跡が僅かに残っているだけだ。祖父を土葬した曾谷森中腹の鞍部は、ブルドウザーで掘削されたらしく跡形も無くなり地肌を見せていた。

強い陽射しを浴びながら、曾谷森とナレを背にして道を戻った。

盛岡へ戻る途中に再び図書館を尋ねて、古い郷土誌の「江南郡志」を借り出した。第八師団の第三十一連隊に所属していた菊池馨の祖父は、勲章受章者の名簿に名前が無かった。

馨から借りた彼の祖父の従軍日記を読みなおした。日記の最後は一九〇五年の四月であった。日露戦争の最終的な決戦、奉天大会戦から一カ月半後の日付である。

祖父・兜次郎が所属していた部隊は、第五連隊で、戦闘に参加していた五連隊の隊員は全員、旭日章勲七、八等を貰っていた。日露戦争の戦役で表彰された扇沢村の人数は、第五連隊だけで十五名いた。受賞したのは祖父だけではなかった。資料の読み過ぎによる疲れと興奮が重なって、寝床へ入っても、うつらうつらとした頭は夢と現実の区別がつかない。

明治二十八年の一月下旬に中国東北部の黒溝台で日本軍とロシア軍は激突した。黒溝台会戦での日本軍の参加人員は約五万四千名、ロシア軍は約十万五千名。戦闘による日本軍の損害は死傷者が約一万名、ロシア軍の損害は死傷者が約一万名、俘虜が約千名であった。

二十七日の午前八時に渾河支流の岸边に、第五連隊が着くと他の部隊の大半は既に集合していた。兜次郎は、銃剣を握りながら初の戦闘に緊張していた。

連隊長の命によれば、相対するロシア軍は二個軍団で、日本軍の二倍だ。しかもその主力部隊は、逐次各戦線に増加する模様である。

「砲撃開始とともに、前進せよ。持ち場を離れてはならない。軍人手帳に書かれた規律を忘れるな」

と連隊長が指示して、整列した歩兵を叱咤激励した。岸边か

ら凍った河が銀色に見えた。

午前九時に日本軍の砲が唸りを発して撃たれた。ロシア軍も砲を撃ち込んできた。零下二十度の寒さの中を進軍する。十一時ころに砲兵が敵の銃に撃たれ、砲手も次々に負傷した。敵の砲撃は益々激烈となって、連隊は三方向より十字砲火を浴びた。

「畑の中を前進して、暫く川岸に寄って伏せろ」

と小隊長が命じた。敵軍は至近距離から爆発物を投下して来た。

「ひるむな、反撃せよ」

喚声を上げて右岸の畑に出て敵を撃った。銃撃戦は約六時間に涉った。敵の砲弾と銃火が、雨霰のごとく降り注いだ。

連隊員は、交互に、

「全滅を期して、斃れるまで、弾薬の尽きるまで攻撃を続ける」

と絶叫して士気を高めた。兜次郎は、寒さと恐怖心で身体の震えが収まらなかった。

歩兵の一人が銃を撃たれ、持っていた銃剣の銃身が割れた。直ぐに戦死した歩兵の銃と交換した。前を進んでいた歩兵が身を伏せている最中に、敵の銃弾が菓盒の蓋の中央部に命中し、突き抜けて水筒を貫通した。

敵の弾が兜次郎の防寒用外套と毛皮の胴着の肩部を貫通し

て、分厚い絨衣の表に弾の孔を残した。思わず銃剣を凍土に落した。その時、次の弾が背囊内の飯盒を貫通して、危うく命を落とすところだった。

午後六時半に、攻撃が中止された。人員を点検したあと、凍土を掘り起こして木柱を立てて、高粱の殻を並べ縄で縛り小屋を作った。高粱の殻を燃やして暖を取り、防寒着と防寒靴などを乾かした。各自、持ってきた米を飯盒で炊いた。

ほっとする間もなく、小隊長が指示した。

「安西。午前零時まで歩哨をせよ」

「はっ。小隊長殿」

防寒用外套を身につけて、生湯きの防寒靴を履いた。

「立ったまま眠るなよ。凍死するぞ」

と上等兵が注意した。

六時間後に、

「起床。銃を点検して八時に集合」

の指示があり、全線は二列横隊となって渾河の岸边に集合した。中隊ごとに逐次岸边を離れて、小高地に向かって前進した。黒溝台の東方高地に陣取っているロシア軍は日本軍を見下ろして、堡壘から機関砲で撃ち出した。降り注ぐ銃弾は、雨のようであった。右翼方面より飛んで来た榴散弾が爆発し

て、霰のように落下した。

三方向から十字砲火を受けた連隊は、

「後退するな。行け」

という連隊長の命令で、決死の覚悟をした。連隊は数十歩ごとに地に伏せて弾丸を避け、再び前進した。野戦歩兵連隊が、午後三時ころより前進し敵に当たり、死傷者を多数出した。日本軍は日没まで猛烈な銃撃を継続した。

午後七時ころに攻撃は中止された。このまま戦闘を続けたら、明後日は全滅するだろう。日本軍には後続部隊がない。

疲労し果てて雪の中に倒れ伏したまま、睡眠する兵士がいなかった。兜次郎は兵士を叩き起こして、凍傷に罹らないように一緒に手足の運動をした。日没後、負傷者が担架係りの兵卒を呼ぶ悲鳴が四方に起こった。

午後八時三十分ころに伝令が来た。

「黒溝台を夜襲する」

というのだ。午後十時に全線は黒溝台に向かって前進した。

高粱を刈った根に軍靴が触れて音が鳴った。黒溝台の高地に近づくこと五百メートルの地点で、急激に敵軍が射撃を始めた。前進をやめて地に伏し、数分後にまた起き上がって弾丸雨の中を猛烈に進んだ。

「突撃。後退するな」

と小隊長が叫ぶ。弾雨の中を逃げ遅れている敵兵を見つけて銃剣で斃した。剣を抜いた途端に鮮血が雪の上に散った。敵兵が次々と斃れた。日本軍は退却するロシア軍に向かって射撃した。午前四時四十分には戦闘は完全に終わった。

兜次郎は敵軍が使っていた堡壘の中に、死んだ兵士を井桁のように積み重ねて、井桁の真ん中に剥ぎ取った防寒用外套を何枚も敷き、疲れと眠さの余り倒れ込んだ。

目が醒めると、連隊の仲間はおろか日本軍部隊の姿は無かった。分厚い凍土の上は猛吹雪で、視界が閉ざされている。困惑した。背負ってきた食糧が底をついている。

吹雪が止むのを待って、井桁から這い出し、渾河沿いに上流に向かって歩き出した。

雪の中に敵味方の兵士の死体が転がっていた。戦闘の被害を受けた農家が無残な姿をさらし、いずれも無人であった。

陽が沈む前に、どこからか、

「おーい。……おーい」

と叫ぶ声がした。

「ここ。……こつちですよ。助けてください」

焼け落ちた農家の陰に、土気色した顔の兵士が蹲まっている。る。

「どうしあんした。お前さんは、どの連隊ががす」

「第八師団食糧隊の兵卒で……。うつ、痛い」と歯を食いしばっているような返事だ。

「どこをやられたががすべ」

一寸、心配になった。もしも、歩けないのであれば、この先、助けようがないのだ。

「肩に弾が当たってしまった。右手が不自由に：つう、痛い」

防寒用外套の肩が破れている。

「命に別条はなさそうががすな。……今夜の罅を探しているのだが、どこか手頃なところは無いものか」

焼けた跡のある木板を銃剣で削り、スコップ代わりにして、もとは家屋があったらしい場所の凍土を掘り起こし、周囲を板で囲い、寒さをしのいだ。敷物は、僅かに兵士の軍服である。

「一日分の食料は残ってますだ」

と言って、相手は外套を被っていた防寒用の軍帽を手に取った。色白細面の男である。

「おらは第八師団第五連隊に所属している安西兜次郎と申します。故郷は、岩手県中部江南郡の扇沢村ががす。お前さんは」

戦闘には向かない、頭のよさそうな男に興味を抱いた。

「は。菊沢常信と申しまして、同じ江南郡の金剛村ががす」「なんと。うんだば、おらの村と山一つ隔てた村ががすな」曾谷森を挟んで東が扇沢村で、西側が金剛村なのだ。お互いに故郷の話になって、菊沢の生い立ちを尋ねた。

菊沢は、金剛村の満像寺の若い住職であった。寺には、母と二人の妹がいるという。

兜次郎は、

「おらは、おつかあと幼い娘二人を残しているががす。本当のごと言え、跡取りを設けるまでどうしても死んでなんかいられないががす」

思わず妻子の行く末を心配して口にした。

「あんだは、絶対に生きて、故郷に帰ってください。私は、その代わりに死んであげます。なに、私が死んだら、残った骨つこを満像寺に収めてください。飯盒を奉天まで連れて行って、溶かし、箸にでもしてください」

と言い、続けて南無法蓮華経と口の中で唱えた。

「ば、馬鹿なことを言うんでねえ」

常信は肩の負傷と寒さがもとで亡くなった。兜次郎は、飯盒を雪の上に置き、常信の手の指を切断し亡骸を凍土の上に葬った。指を切断したのは、住職の遺言を守るためだ。

「……南無阿弥陀仏。……南無阿弥陀仏」

奉天の南西、紗河付近にいる第八師団第五連隊に辿りついたのは、部隊から離れて数日後であった。日本軍は、奉天での戦いに備えて兵士に休養を与え、損害を出した部隊を補充し、隊伍を整頓して綿密な作戦を立て、軍団の将校との会合を幾度も重ね戦線を構築していた。

二月二十六日から三月十日にかけて奉天で大会戦が行われた。参加した兵力は、日本軍が約二十五万名、ロシア軍が約三十二万名で、会戦による死傷者は日本軍が約七万名、ロシア軍が約九万名であった。ロシア軍は敗退し、俘虜として約二万名を出した。

四日の朝に、兜次郎の第五連隊が所属する第八師団は、渾河を渡って奉天城西南の甘官屯と寧官屯へ進出し、第九師団と並んだ。

五日のことだった。敵軍は鉄道線路から外に面する東西と南の戦線を支配し、日本軍との間は、近いところで二百メートル、遠いところで千二百メートルの位置にあった。第五連隊が受け持つ地帯の一方は平原で山や森は無く、村と村の間に道が走っていた。

未明に出発して、十時過ぎから攻撃を開始した。敵軍は甘官屯に頑丈な堡壘を築き、鉄条網と深い落とし穴を作っていた。

た。土囊へ土を盛ろうとしたが、凍土で思うように土が掘れなかった。やむなく、背囊などを盾にして敵の弾を防いだ。

敵は機関砲などの筒口を揃えて撃ち出した。前進も後退も出来ないまま日が暮れた。六日も同じ態勢で過ごし、七日には甘官屯と揚子屯を攻撃したが成功しなかった。敵軍は、陣地をより強固な場所へ移ろうとし、退却を始めた。

隊伍を整えて敵軍を追い、激戦になり、同郷の兵卒が多数戦死した。ロシア軍は反撃してきた。広い平原の中に鉄道線路があり、線路の土堤の上から敵が銃撃してきた。榴散弾が落下して、小隊長と兵卒が斃れた。負傷者が続出して隊形が崩れた。

敵前二十メートルの距離に迫った時、敵の弾が兜次郎の防寒靴の先端に当たって靴に孔をあけた。続く弾が頬を切り裂き、眼に火花が入って血が流れた。背中の飯盒と防寒用外套のポケットに仕舞い込んである数珠を確かめると、いずれも無事だった。

塁堡から飛び出してきた敵兵と切り合いになり、相手の喉を銃剣でえぐった。鮮血が雪を紅に染めた。地雷が爆発し肉片が転がった。口から弾丸が入って咽喉を撃たれながら、

「おっかあ」

と叫ぶものがいた。

ロシア兵も、哀しい絶叫を上げた。

甘官屯と寧官屯を占領して揚子屯へと進んだ。揚子屯は鉄道線路に沿った枢要の地点であり、奉天城が後ろに迫っている敵軍は退路を断たれていた。敵軍は鉄条網と深い落とし穴、鹿の角を交差した形のバリケード、壕を作って半永久的な工事を施し、機関砲などを備え頑丈に守っていた。

朝陽が山の上に顔を出した時、敵軍は盛んに撃ち出した。連隊は攻撃に出たが、損害が夥しかった。重砲弾が連隊に向かって盛んに落ちてくる。

「夜襲だ。それしか現状を突破できない。絶体絶命だ。生きて還れると思うな」

との命令が出てくるころ、互いの攻撃は緩慢になった。決死隊が組織されて、夜の十二時過ぎに三縦隊で陣地を出発した。夜襲が失敗して、互いの軍隊が夥しい損害を出した。

疲労困憊している九日の夜になって、敵軍が鉄嶺に向かって退却し始めた。

「全力で追撃。せん滅を目指して突撃せよ」

と連隊長が指示した。最後の力を振り絞って敵軍を追った。逃げ切れないと見た敵兵たちが銃剣を振りかざして向かって来た。銃撃と銃剣で入り乱れての戦闘となった。

累々たる屍を踏み越えて敵を斃し、生きている兵は俘虜と

して捕えた。奉天街の家屋は、日本軍とロシア軍の戦闘に巻き込まれて破壊され、住居を失った住民が難民となって彷徨し、食糧不足と寒さのために震えていた。

兜次郎は、戦闘の中で「完全に自分は狂った」ことを感じた。

ロシア軍は奉天を去った。昨日までロシア軍の占領下にあった中国人は、日本軍の占領下で物資と生きる道を求めて、新たに動き出した。

三月十五日に先頭部隊が奉天城の四門八街に水を撒き、塵を掃って彩燈と幡幕を掲げ、日章旗と黄龍旗を林立した。

精鋭部隊が大南門の内外に分列式を行い、連隊の歩兵を前衛に備えて、軍楽隊が行軍の譜を奏した。「一日四星」の日本軍司令旗が馬上の騎兵によって高く棒持され、日本軍総司令部の將軍たちが肅々と入城した。

「日本軍万歳」

という歓呼が街路に響いた。総司令部が入城し、勝利を宣言したあと連隊は一時休息をとり、次なる戦闘への英気を養った。日本軍は五月に日本海会戦で劇的な勝利を収めて、戦争は終わりに近づいた。

兜次郎は、連隊長の許可を得て、奉天の町の鍛冶場で飯盒を熔かし、別に熔かした銀と混ぜて煉瓦と煉瓦の細い隙間に

流し込み、二対の銀の箸を作った。一対は故郷に持ち帰るためであり、もう一対は戦友の故郷である金剛村の満像寺へ、指の遺骨とともに収めるためであった。

祖父のことを調べ、故郷の幼馴染みに会って得た情報などを、兄弟へ電話で報せた。

長兄は、

「そんなに居たのか。確かに『村で帰って来たのは、俺だけだ』と言っていたのに、おかしいな。それにしても、よく調べてくれたね。分からなかった所属のことがはっきりした。隣のおじいちゃんの話は、全然記憶になかったな」

と少し驚いた様子である。

「うちの親父さんが、もう少して太平洋戦争に出征するところだったそうだけれど、おじいちゃんは何て言っていたのかな」

日露戦争の英雄の息子が、戦争に行けないことを恥じていたのではあるまいか、と思つて尋ねた。

「みんな、行かなくて良かったって喜んだよ。親父本人は悔しがってね。恥ずかしいと。ハハハ。身体を大事にしているよ。聡子さんよろしく」

花巻の農家に嫁いでいる姉は、



「おじいちゃんね。奥の間に長持ちを並べて、その間で寝起きしていたよ。夜中に狂ったような声を上げてな。傍に行つてみると脂汗を掻いていたよ。痲癩持ちでな。目をぎらつかせて木の枝で長兄を叩いたりしたっけな。俺をばかにするやつは、孫でも殺す」って言ってな。おっかなかった。夢かも知れない」

相当怖い場面を見たらしく、声がいつものようでもなく明るくない。

「おばあちゃんは静御前のように美しくて優しい人だったよ。おじいちゃんは死ぬ直前にとうちゃんへ、『長兄に、これをやつてくれ』と枕の下から大金を出したそうさ。あれが年金だったんだな」

と、段々と記憶が甦つて来たように話し出した。

「ほう。大金だったとはね。いくらくらいだった」

当時、祖父は年間二百円程の年金を受け取っていたと思われ。

「さ、そいつはわからないな」

四つ年上の兄は、

「おじいちゃんは酒が好きだったから、馬喰に騙されて売ったんじゃないのか。立派な馬が居たけれども、馬喰に騙されて持っていかれたぞ。だからいつだって、金は無くて貧乏

だったな」

と、祖父の評価が厳しい。

続いて、

「先日、おじいちゃんから聞いたことを話したんべ。そのおまけだけね。食い物がなくて、死んだ住職さんの指を焼いて食べたそうだよ。……ハハハ。本当は英雄なんかじゃくてさ。中国人の物を略奪して、あっちこち逃げ回っていたんでないの」

「それは……」

そこまで、祖父は追いかまれていたのか、と暗澹となった。

「……しかし、おかしいな。御墓を東京に移す際に掘り起こして探したけど、あの菜箸のような長い銀色の箸は、土中から出てこなかったぞ」

「俺も見えないな」

先祖の墓を東京へ移す際、私も妻と一緒に現場にいたが、銀の箸は無かった。その後、ブルドウザーが入ったいま、銀の箸は、箸の断片さえ見つかる可能性は無い。

電話を終えて、小手毬の花が散り、紫陽花が陽を浴びている庭に視線を移しぼんやりしていると、バイクの音がして郵便配達員がポストへ郵便物を入れた。

薄青い色の封書が届いていた。ドラえもんの絵が描かれて

いて、差出人は東京の孫・新太郎であった。

「おじいちゃん。おばあちゃん。おげんきですか。ぼくは、おとうさんとえいがかんで かぜたちぬ をみました。おじいちゃんたちもみてね。とうきょうにくるまえに、てがみをよこしてね。ばいばい」

と書かれてあった。

「あら誰から来たの」

と二階で洗濯物を畳んでいた聡子が階段を下りて来て、訊いた。

「新太郎からだよ」

「えーっ。新ちゃんから。初手紙だわ。嬉しい」

外光が射す部屋の中で、手紙を開けて楽しそうに読む彼女の横顔は、眩しいほどだ。